

ROTARY CLUB OF

**KANAZAWA-NORTH**



**金沢北ロータリークラブ**

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：金沢市東山1-38-30・松魚亭

TEL <0762> 52-2271

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 22-2525

会長：沢田哲夫 幹事：米沢修一

情報委員長：春田義正

1985・12月5日 第304号

85～86国際ロータリー第261地区  
石川第一分区・第二分区

**インターシティー・ゼネラル・フォーラム**

**基調講演「私と地蔵」**

小島 寅雄氏



私が教師をしていた若い頃のこと、授業中に居眠りする子がいた。早朝の新聞配達のためと聞き、私もそれを体験してみた。毎朝早く別荘地を廻ると、いろいろな女中さんがいた。また夕刊を配達する夏は、海水浴から帰る人たちが道にあふれ、自転車のベルを鳴らしても誰もよけてくれない。いったい私は本当に学校の先生なのか、私は何者なのかと思い、そのことからやがて仏門に入った。曹洞宗

だったが、坐禅をするとわからぬながら緊張感があった。

その後、手甲や脚絆をつけてお遍路のまねをした。小諸あたりの農家で、私の背後から3人ほどの子供が駆け抜けざまに乞食と言った。私は先生と呼だれながら、衣服によっては「乞食」と呼ばれ、駄菓子屋では出した5円札を透かして見られ、宿屋では満室だと云って泊めてくれなかった。

その20代の経験は、やがて無視されて生きる喜びを知るが、後年は魚屋からおじさんと呼ばれる。僕は先生、教育長だと思っから、当然だがおもしろくない。無視される苦しみもあると気がつき、その頃から気持が更に仏に近づいていった。

35才の頃、石仏が欲しくて自分で彫ることにした。庭でノミを使っていると、石に蟻が上ってくる。仏を作っているのだから蟻は殺せない。そんなことは、やったから気付くので、やらなければわからない。仕上げる最後になって石仏の首が落ちた。野の仏にはお地蔵さまが多く、また欠けたところも多いが、風化や倒壊で欠けたと云うより、はじめから自分で捨てる気ではないかと思う。

「念仏をどう称えるか」の一遍の問いに、「身を捨ててこそ」と空也は言った。なにごとにも仏道修業だから選挙をやったらどうかといわれ、雲水のつもりでやっていたがこの10月の市長選挙で落選し、その後は剃髪して今その意味を考えている。

名前も紫雲となり、真面目に残る一生を終りたい。

(文責 吉田富士夫)

## 基調講演 「いのち華やぐ」

瀬戸内 寂聴 氏



小島先生は謙虚で、自分を卑下されるが、いつも先生の仏画を拝見して缥缈と天界から降りる天女のような、清らかでエロチックな仏様に感嘆する。芸術はエロスを湛えなければ出来ない。あまりに可愛いので私は散華に先生の仏をそっくり真似して描いて、先生の弟子だと天下に発表した。とかく政治家は汚いから落選はおめでたいことで、先生のために良かったと思う。

私はタダの人といはれるのが一番幸せなので、頭を剃ると目立つから悪い事をしないと公表することになる。車中で駅弁を食べると寂聴が弁当の肉を食べたと噂になるから、タダの人が羨ましい。

出家をするとはどういうことなのか。だいたい金持とはケチなもので、金と地位と名誉を得てもこれで良いのかと悩む。人間とは普通そんなもので、自分の死後の会社や家庭や馬鹿な息子がどうなるかと心配になる。豊臣秀吉の心境が多い。私は死後の現世など気にかけず、彼岸を考えなさいと云う。

私が雲水の姿になって、大男の雲水たちの後について歩くと、小さな私におもらいが集るが、金持の門前では、くれたためしがない。

京都の長屋にいるような貧しい老婆は、布施とはなにかを識っていて私に合掌する。

彼岸へ渡るには、六波羅密の行が要る。その第1が布施行で、老婆はそれをさせてもらった、雲水はさせてあげたとして、お互いに合掌する。波羅密には法施や顔施のように、良い言葉をかけてニコリ笑うだけでも行はできるが、金持は布施行をして物欲を捨てるのが最も良い。戦争に生き残ったのは幸運だが、半面では罪深いことで無知でもあった。晩年は出家までしなくていいから施すこと。

空也や一遍は「捨ててこそ」と云ったが、釈迦は大勢の人々のために家庭も自身も捨てた。小島先生は真面目に一生を終ることを考えたいと云われたが、先生の良いところは好奇心が強いことで出家するのも仏に身をゆだねる気で、やってみなければ解らないし、好奇心がなければ出来ない。私になぜ出家したのか、自分自身でさえわからないが、今にして思えば仏縁の機が熟していたから出家したわけで、昭和48年11月の第一時石油ショックのころ、仕事は余るほどあったが小説家的触覚で、自分も世の中もこのままでは駄目になる、自分が生きることに感動しなければ読者にすまな



いと思った。日本の文学には、西行のように出家してよりよい作品をつくる伝統がある、出家したらどうなるのか前後も考えないでしたが、奥比叡での修業など数々の経験ができた。未来に向って自分の可能性をためす好奇心を失わないことこそ最後まで生きること、今は命より大切な時間を捨て、庵を建てて開放し、眠ることさえ捨てて身を削り社会に布施することに決めている。皆様も布施をして下さい。

(文責 吉田富士夫)

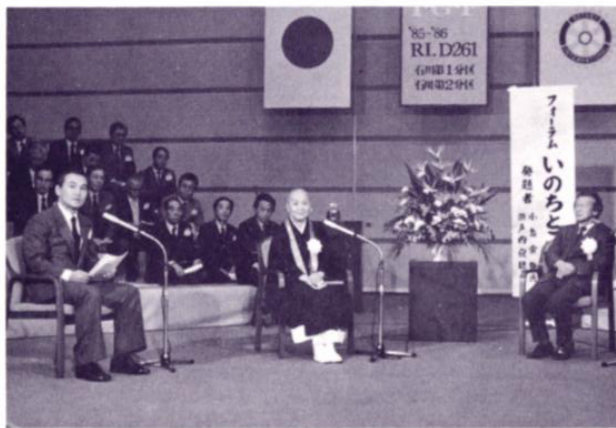
11月24日、時雨が枯葉を濡らす日曜の一日であったが、石川地場産業振興センターの会場へは、桜井能唯ガバナーをはじめ特別参加者15名、ホストクラブの金沢北ロータリークラブの多数参加を中心に 300名余が定刻に受付を開始、県教育振興会など一般の聴講者多数が来場した。米沢修一幹事が総合司会、沢田哲夫会長の点鐘で午後1時開会、プログラムは基調講演「私と地蔵」小島寅雄氏、「いのち華やぐ」瀬戸内寂聴氏と進行して、聴衆に深い感動を与えた。休憩時間は講師の著書にサインの希望が多く、盛会となった。6辺形に坐席を設営して、問う人と答える人の距離を少なくしたいと配慮された、フォーラム会場のように、ホストクラブの新鮮な企画は好評であった。また例年I.G.F.記録は印刷形式で報告されたが、本年は大会の雰囲気を取り易く報告できるよう、基調講演、フォーラムともビデオ方式が採用され、木村、村田会員がカメラを担当した。

## フォーラム 「いのちとこころ」

浅田豊久実行委員長長の周到な司会で、求道の位置を極限に押し進めた発題者の「陽の当る道を歩む人は、日陰の人々の心の飢えや傷つきを忘れるな。」の言葉に、桜井、浅尾、高沢、伊藤、田中、石黒、安田の各ガバナーが、それぞれロータリアンとしての奉仕の信条を拡げ、また清水忠会員の「山川草木すべて存在する物には命や心があるが、人はそれを殺し喰うことで生きている。救われるにはどう生きるべきか」の質問に、「全て失った者は神を見るの言葉がある。自分で捨てられないときは、他力に捨ててもらおうこと。」(小島氏)。「全ての物に仏性がある。良いことは他人に、悪いことは自分で引き受けるのが慈悲で、愛と祈りには利息がついて戻らない。仏の無償の愛の境地に死ぬまでに至りたい。」(瀬戸内氏)の答えが印象に残った。講演の「いのち華やぐ」について、「生きる焔がエロスであることは美しいし、普通の人はいそれまで捨てないで、老後も心を若くして楽しく生きること。」の言葉があった。

午後5時、沢田会長の感謝の辞と点鐘で閉会した。

(情報委員 吉田富士夫記)



### 今週の花

吉山宥海  
(11月28日)

山ちやがら  
西 王 母



